

中国の法相宗における安慧一分説の再考 ——「転識成智」を中心として——

陳 宗 元

一 はじめに

『成唯識論』では安慧の説について二分が二取でまた八識皆有執であると伝えることが、法相宗によって安慧は一分説であると見なす根拠である。しかし安慧の『唯識三十頌釈論』において相当する原文が見当たらないので、勝又俊教はこの説が安慧の見解ではなく、護法の考えか或いは玄奘や窺基が勝手に解釈したものではないかと推測している⁽¹⁾。

勝又俊教の観点に対して筆者は「転識成智」という概念から考え直したい。つまりもう一つの側面から『成唯識論』及び諸釈疏を検討することによって安慧が一分説であると見なされるその根拠を考えてみたい。

二 転依に対する理解

先に述べたように安慧は有漏の八識が皆有執であると考えられている。ならば、法空観が現れたとき、第八識の識体は断た

れ、消滅するのだろうか。これについて、安慧は『唯識三十頌釈論』において、次のように書いている。

「それらの煩惱・随煩惱の種子は阿頼耶識の中に住み着き、それと俱有する煩惱対治道によって除去されるのである。そして、それが除去されたから、再びその所依⁽²⁾によって諸煩惱の生じることはない。故に有餘涅槃界が得られる。」

文章の「apanīta」は「除滅された」或いは「除去された」と訳されている。つまり、この文章によれば、阿頼耶識が除滅されると、諸煩惱の生じることはないし、有餘涅槃が得られる。一方安慧の除去 (apanīta) 説に対して、護法は次のように述べている。

「不復執藏阿頼耶識為自内我。由斯永失阿頼耶名説之為捨。非捨一切第八識體。勿阿羅漢無識持種。爾時便入無餘涅槃。」(大正三一、一三下)

ここで護法は阿羅漢を例に挙げ、阿頼耶識を自分として執着しなければ、阿頼耶識の識体が存在し続けても、阿頼耶識

の名を捨てることになるのである。また、阿羅漢になっても、種子を持つていないはずがないので、種子を持つている識体が阿羅漢になっても依然として存在していると言うことが考えられるのではないかと解釈している。ここで、阿頼耶識体を捨てるかどうかについて、護法は無着・世親を中心とする伝統的な唯識学説とは違う見解を示している。伝統的な唯識学説では、阿頼耶識は全て不浄の種子の根本であり、世親も『大乘五蘊論』などの論書において既に表明している。安慧の『大乘廣五蘊論』でも世親の阿頼耶識の見解が引き継がれている。更に、真諦も安慧の思想を継承し、解脱のとき、直ちに煩惱の根本である阿頼耶識を捨て、第九識を聖道の依因とする阿摩羅識を立てることになる。それ故に、真諦訳の『撰大乘論釋』において説かれる。

「捨凡夫依作聖人依。聖人依者。聞熏習與解性和合。以此為依。一切聖道皆依此生。」（大正三一、一七五上）

真諦はこの聖者の転依を凡夫のそれと違うものであると理解している。彼の言う転依とはつまり阿頼耶識を転捨し、新しい清浄な出世転依を立てざるを得ないものではないかと理解される。

真諦の阿頼耶識の転滅論に対し、玄奘訳の『撰大乘論釈』においては、次のように述べられている。

「於一阿頼耶識中。非等引地煩惱熏習漸減。其等引地善法熏習漸増。

中国の法相宗における安慧一分説の再考（陳）

而得轉依。」（大正三一、三三四中）

上記の如く、玄奘の訳において転依とは単なる阿頼耶識の内部種子の転換であるに過ぎない。また、聞熏習は阿頼耶識の種子を退治する能力があり、阿頼耶識と和合し存在するのである。しかし、阿頼耶識に取って代わることはできない。つまり、真諦訳の「捨凡夫依作聖人依」という転依の概念は玄奘訳の「熏習漸増」とは違う見解を示しているのではないか。

三 法相宗の転依原理

そのために、窺基は第九識が成立する必要はないと考えている。例えば、窺基の『述記』において、次のように説明している。

「或名阿摩羅識。古師立為第九識者。非也。然楞伽經有九種識。如上下會。此無垢識。是圓鏡智相應識名。轉因第八心體得之。」（大正四三、三四四下）

この文章から窺基は真諦の第九識が実は因位の阿頼耶識の識体を転じて成就する大円鏡智のもう一つの名称に過ぎないと考えているということがわかる。更に、窺基も『楞伽經』の句頌「八九識種種、如海衆波浪」（大正十六、六二五上）という例を挙げて第九識は第八識の浄分を転じて成就する無垢識であり、つまり第九識は第八識の浄分によって顕現されたも

中国の法相宗における安慧一分説の再考（陳）

二二四

のに過ぎないと説明している。

それ故に、玄奘と真諦の間に、阿頼耶識に対する清浄と汚染の両面性や、純汚染性のものという認識の相違が存している。しかしながら転依のプロセスにおいて、阿頼耶識が無垢識に転じるとき、その主体性はどのように保たれるのであるうか。護法の解釈によると、阿頼耶識の識体は阿頼耶識↓異熟識↓無垢識などの順で絶えず転化していく。⁽⁴⁾ 転化するプロセスにおいて、その質は絶えず浄化し、向上していく。しかしその識体は変化しながらも、その本体は統一性を保っていることがわかる。なぜならば、阿頼耶識は解脱の位において我執を無くし煩惱の種子を断じることが、阿頼耶識の識体は無漏の種子を執取する能力を失わず、依然として識体の特性を持つていると考えられているからである。例えば、惠沼は『成唯識論了義燈』において次のように述べている。

「若し我執無きときには能縁の縛を離れたるをもつて頼耶の名を捨す。結生すること無しと雖も、猶、根と種を執するをもつて陀那といふを失せず。」（大正四三、七三〇上）

ここで、我執を断じた阿頼耶識は依然として根と種子の機能を持つており、その名称は異熟識に変わっても良いのではないかと惠沼は解釈しているということがわかる。

しかし、そもそも有漏の位から無漏の位へ転じるとき、その「転識成智」の理論はどのように成立できるのだろうか。

例えば、護法は次のように考えている。

「又有漏の位には、智は劣にして識は強なり。無漏の位の中には、智は強にして識は劣なり。」（大正三一、五六中）

この文章によつて、有漏位と無漏位との差異は識と智との強弱にあるのみに過ぎないと考えられる。有漏の位であれ無漏の位であれ識と智の両方とも具えている。識と智との差異は単に真如を認識する能力の強弱であり、認識するという本質から言えば何ら相違もない。その原理を窺基は次のように解釈している。

「識是分別有漏位強。智為決斷無漏位勝。轉（識之）強得（智之）強故言得智。」（大正四三、五九九中）

つまり、有漏識の種子と無漏智の種子は内容としては相違があるが、種子の機能から言えば、大した差異はない。従つて、識の種子は清浄の種子に変換することが可能である。また、護法は無漏種子の新薰説と本有説の両方とも強く支持し、⁽⁵⁾ この新薰説と本有説によつて転依の理論を立てている。この理論について、窺基は『成唯識論述記』において次のように説明する。

「入見道已別熏生種。無漏行故。地前但令舊種增長。有漏現行勢力弱故。不別能令無漏種起。此中但言由聞熏習令本有種漸增盛故。」（大正四三、三〇九上）

ここで窺基はもっと明確に地前位の前後によつて無漏の種

子の生成が起こる二段階について説明している。つまり、地前位の前は本有説によつて、聞薫習による無漏の種子の勢力を増強させる。しかし、地前位に入ってからには、新薫説によつて次第に無漏の種子の勢力が強くなり、その結果新しい無漏の種子を生じること示している。

さらに、その護法の転識理論の二段階論は恵沼の『了義燈』においても詳しく説明されている。例えば、次のように書いている。

「本有無漏の種子に三品（見、修、無学）あり。加行位の如き下品の（無漏本有）種増して、（下品）初見道の無分別智を生ず。すぐにこの現行の無漏が力あつて中品の種（修道本有種）を資けてよく（中品修道の）現を生ぜしむ。また自種をも転じて中品と成らしむるを名づけて転齊となす。」（大正四三、八〇八上—中）

つまり、加行位の下品無漏の種子は見道位の時、その現行が強くなつて、新しい中品の無漏種子を生じると同時に自分の下品無漏種子を中品の無漏種子にまで向上させるから、転齊と呼ばれるのである。このように、新薫の無漏種子が下品の無漏によつて生じ、中品の無漏種子となるだけでなく、本来の下品無漏種子までもその現行によつて中品無漏種子へと転じられるのである。それ故に、上品位の時において下品位の無漏種子は消滅するのではなく、質的に転換されるのである。もし下品の無漏種子は見道位の時、滅されるなら、それは転齊ではなく転滅と言われるべきであろう。よつて、識体

は、中品位の時においても下品位の種子を捨てずに種子と現行との相乗効果によつて無漏種子の新生と質的な向上が行われる。それならば、雑染の識体が清浄な識体に変わりながらも、両者には統一性が保たれることになるう。

従つて、法相宗の考え方によると、見道位前後の識体は完全に違うものではなく、なんらかの一致性が保たれるのではないかと理解しても良いであろう。なお、窺基は有漏の種子と無漏の種子は完全に繋がらないものではないと考えている。それは有漏種は無漏種の勢力を強める増上縁にもなるし、決擇分の善根の有漏種は無漏種に変わることもできるからである。⁽⁶⁾

四 二分唯識の真如説

また護法の「転識成智」という理論をもしもう一つの側面から見れば、実は唯識と真如との転換とも考えられる。例えば、次のように説かれている。

「或依即是唯識真如。生死涅槃之所依故。（中略）此即真如離雜染性。如雖性淨而相雜染。故離染時假說新淨。即此新淨說為轉依。」（大正三一、五一上）

ここにおける「如は性淨なりと雖も、而も相は雜染なり」とは、真如は性淨と相染の両面性を具えているということを示している。「或依即是唯識真如。生死涅槃之所依故。」と説

中国の法相宗における安慧二分説の再考（陳）

二二六

明しているのは、つまり無着の二分依他起性は護法の二分唯識真如となり、その唯識真如が生死と涅槃との拠り所になるし、迷と悟との拠り所にもなる。⁽⁷⁾

また「故離染時假説新淨」とは阿頼耶識の識体を滅せず、真如に転変する時、阿頼耶識の淨分が現れてくる。それ故に、識と真如の差異は単に識性による雜染相及びその清淨な性質の違いのみに過ぎない。従って、護法の解釈によると、識と真如は一体の両面であり、識による生死と真如による涅槃は実は不二である。真如がその相雜染であるという説は伝統的な唯識説と比較すれば、護法の独創的な見解ではないかと思われることができる。なお、唯識真如による生死と涅槃について智周も次のように強調して述べている。

「故に仏は彼の依他起の際の生死涅槃を証し二つ偏に得せず。依の体は一にして二分に通ずるに由るが故に」（大正四三、九五七上）

「生死・涅槃不二」とはつまり生死と涅槃は同じ真如という依体によるもので、両者とも唯識の識性によって存在するものである。

五 金土蔵の比喻における相見二分

二分識性について、智周はまた『演秘』の中で無性の『撰大乘論釋』を引用し、金土蔵の比喻によって識性と三性との関係を例えている。例えば、次の如く説く。

「釈論に云わく、地をば依他に喩え、土をば遍計に喩え、金をば円成に喩う。唯識の性は依他起にして、遍計と円成とは是れ此の性分なるに由るなりと。」（大正四三、九五七上）

つまり、遍計所執性から円成実性へ転化しても識性は依然として存在している。これはまるで土蔵から金蔵へ変化してもその地界は実存し続けるようなものである。

また、金蔵であれ土蔵であれ、いずれにしても地界の違う顕現に過ぎない。蔵は種子のことであり、その現行は相見二分である。この相見二分は実は蔵と同じように識性の働きである。まるで火のような無分別の智によって焼かれると、地界の金蔵（円成実性の無漏種子）が顕現し、土蔵（遍計所執性の有漏種子）が転滅することになる。しかし、金蔵が顕現された時、依他起性の地界（識性）も依然として存在し続けている。

従って、「純と淨と円との徳あり。現と種との依持たり。」（大正三一、五六上）と説くように相見二分の現行と種子との関係は仏智の中で依然として存在していることが法相宗によって理解されている。仏と衆生とも二分を具えており、この二分は種子の現行であり、心心所の働きでもある。護法はその二分が依他起性で、また真実の存在であると強く主張している。これに対して、安慧は二分は二取であり、遍計所執性であるので、仏智の中には二分が存在しないと説いている。なぜかという、仏智は完全に清淨なものなので、有漏の相

見二分を具えていないのは当然なことであると考えているからである。

六 むすび

護法の相見二分が依他起性であるという根拠は真如と妄識が識性によって相互依存するという転識説にある。また仏果位においても「現と種との依持たり」や「身と土と智との影を能く現じ能く生ず」という相見二分の顕現の働きを持っているので、凡夫だけではなく、仏果にも相見二分が存在しているということが証明できる。法相宗の考えによれば、安慧の転識理論は阿頼耶識の雑染性の解釈に傾いていると考えられる。彼は八識が皆分別の我法二執を具えており、八識による二分が二取であると主張している。それ故に、解脱の位における彼の転識理論は識体の転滅論であるとも言えよう。従って彼は阿頼耶識による二分も当然仏の果位にはないという立場に至ったのである。これに対し法相宗は、護法の説に従って、識体を智体に浄化できるという転識成智の理論を作り上げている。識と智はともに識性による存在であり、その理論は護法の真（如）妄（識）相依という識性の転識理論を基に成立したものである。それを安慧の真妄対立という転滅理論と比較すると、安慧の説がなぜ法相宗によって一分説として認められるかという問題を考察する重要な鍵の一つになる。

中国の法相宗における安慧一分説の再考（陳）

るのではないかと考えられる。

- 1 勝又俊教「仏教における心識説の研究」p.34-38。
- 2 宇井伯壽『唯識三十頌釋論』p.126-127 及 S. Lévi *trimsika vijñaptimātrāsiddhih* p.38 LL26-29 PARIS LIBRAIRIE ANCIENNE HONORÉ CHAMPION 1925。
- 3 玄奘訳『顯揚聖教論』卷第十七「當知已斷阿頼耶識。由此斷故。當知已斷一切雜染。」（大正三一、五六七中）。
- 4 『成唯識論』卷第三（大正三一、一三上）。
- 5 『成唯識論』卷第二、（大正三一、九中）「由此應知。諸法種子各有本有始起二類。」
- 6 『成唯識論述記』卷第二（大正四三、三〇八中）。
- 7 『成唯識論述記』第十卷「述曰。第二師解。依即真如。迷悟依也。」（大正四三、五七四上）第二師とは即ち護法宗である。

〈キーワード〉 二分識性、轉齊説、性淨相染、相見二分、真妄相依

（台灣輔仁大學非常勤講師）